

コメの高騰を巡り酒造好適米(酒米)の減産が酒造業界の懸念材料になっているのを受け、全国農業協同組合連合会岐阜本部(JA全農岐阜)が酒造関係者との情報交換に取り組んでいる。先月末には、県を代表する酒米「ひだほまれ」の生産地の高山市で、蔵元や酒米生産者を交えた交流会を開催。酒造りを取り巻く厳しい環境について理解を求め、難局を乗り切るための結束を呼びかけた。交流会には、県や飛騨農業協同組合(JAひだ)、酒造組合員や生産者など約40人が出席。全農岐阜の担当者は、ひだほまれの今年の生育状況などについて説明し、蔵元や生産者と意見を交わした。

コメ高騰

酒米 難局打破へ結束

村政弘組合長は「このままでは『全農とは』『JAとは』の意義に関わる話になってしまう」と切り出した。中山間地の飛騨地域では、収穫物の取引や農機具の導入など、JAが農家を支える重要な役割を果たしている」と指摘し「過疎地域にとつてのJAは大切な存在。助けてもらわないと」と支援を求めた。

一方、奥飛騨酒造(下呂市金山町)の高木千宏代表は酒米の値上がりを受け

全農岐阜や生産者が交流

丹生川酒米生産組合の磯

「(コメが高いから酒の)値段を上げればいいというのは間違い。上げれば売り上げが下がる」と厳しい現状を訴えた。渡辺酒造店(飛

酒造り「永続可能に」

JA全農岐阜が蔵元や酒米生産者らと意見交換した交流会＝高山市花岡町、ひだホテルプラザ



驛市古川町)の渡邊久憲社長は「コメ価格の高騰、農家の高齢化など課題は多数あるが、酒造りは田と農家があつて初めて永続可能な事業。これからも岐阜が酒どころであるためには、農家と手を取り合い、コメ作り、酒造りを続けることが大切」と話した。

生産者からは「JAと全農が生産者と酒造メーカーにとつて『間を通してもらうってよかったな』と思える架け橋になつてほしい」との声も聞かれた。全農岐阜の担当者は「この先も作付けや単価の問題はあるだろうが、(全農の)機能を発揮しながら、皆さんとウィーンになるように進めたい」などと答えていた。

(市原萌子)